

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 52 2019. 3

\*\*\*\*\*

高倉新一郎先生小伝-息子が語る高倉新一郎 (第4回) 新一郎が子孫に遺してくれたもの	高倉 嗣昌	1
植物園と博物館	高橋 英樹	5
ボランティアの会 第33回談話会	山田 大隆	6
虫には虫を～素木得一天敵作戦～	久末 進一	8
骨ボランティア活動報告	濱崎 瑠菜	10
オホーツク文化の旅	井宮 淳恵	11
風邪にご用心～古新聞から～	久末 進一	12

\*\*\*\*\*

## 特別寄稿

### 高倉新一郎先生小伝-息子が語る高倉新一郎\* (第4回、最終回) 新一郎が子孫に遺してくれたもの

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

#### はじめに

高倉新一郎は一族にとって出色のパイオニアと言えましょう。それは新一郎が帝国大学学生になって以来、高倉安次郎の子孫の職業をこれまでの商業(事業)中心から研究者・教育者など「専門職」に一変させたからです。

そうした視点から具体的に見て行きます。

#### 1. 近親者

##### (1) 妻 高倉(旧姓井村)とき

1910年、滋賀県八日市町(現東近江市)で茶屋を営む井村伊右衛門、げんの三姉妹の次女として誕生しました。高倉家と井村家は共に近江土山の出で、新一郎の祖母すまとときの祖父は兄妹の関係であり、新一郎とときは又従兄弟同志です。

奈良の女子高等師範学校(今の奈良女子大)を

目指して彦根の高等女学校(今の滋賀県立彦根西高)に進学しましたが、在学中に当時北海道帝国大学助手であった新一郎と縁談があり、1929年長途札幌に嫁いで来ました。

すぐに両親と同居するも安次郎の事業倒産の波乱に合う中、主婦として定着しましたがそれで終わらず、札幌家庭裁判所の調停委員を四十年近く務め、「札幌調停協会」の女性として初めて会長になっています。晩年は、褒章や叙勲の栄にも浴し、又和歌やエッセイを作してその著書も数冊あります。

ときは、新一郎の研究生活を六十年にわたって支えて来ましたが、特に新一郎が無頓着だった健康面には最大限の注意を払い、八十代後半まで現役の研究者を継続せしめたことは大きな功績です。

\* タイトル「高倉新一郎先生小伝」は編集委員会による

## (2) 子供

新一郎とときの間には2人の子供が出来ました。

上は1935年にやっとできた女の子康子ですが、1939年大晦日に「自家中毒」で夭折してしまいました。

下は私嗣昌で、1937年12月23日（継宮明仁親王（今上天皇）の誕生日）に生まれた高倉本家待望の男であったことから嗣昌と命名したようです。

私は姉のことを全く覚えておりません。

## (3) 嫁

私の妻（新一郎から見れば嫁）は、1942年札幌生の実枝子（旧姓岩田）といい、北海道学芸大学（今の北海道教育大）卒業後、高等学校の教諭（国語）をしていましたが、退職して嫁して来ました。

新婚旅行から帰ったその日から新一郎とは23年間、ときとは41年間ずーと同居し、一家の家事を一手に引き受け、お産と旅行以外穴をあけたことはありませんでした。新一郎の晩年の活躍を間接的に支え、新一郎・ときの最後を看取りました。そのかたわら30才代後半から学習塾の指導者をしています。

実枝子は、実は新一郎と長年にわたり親交をいただいていた島善鄰元北海道大学学長の孫で、「桑園大学村一博士町」に住む先生方とも多重の関わりがあり、私とそれらの縁で結ばれました。

新一郎にとって妻と嫁は非常に近いところに居たことになります。

## (4) 孫

私には男・女・女の順で3人の子供がいますが、それが新一郎の孫のすべてです。

3人とも誕生からずーと一緒に暮らして来ましたので、新一郎を見て「学者」というものを体感して育って来たと思います。そのせいか今は3人とも結婚し、職業を持っていますが、いずれも専門性の高い仕事に就いています。

長男新喜は北海道大学で刑事訴訟法を学び博士取得後、山形大学に赴任し、今は教授をしています。

新喜は祖父の道を真一文字に歩んだことになり



写真1 17年続いた家族7人の生活（1986年1月）  
本の重さで書斎の床が落ち、復旧させた時の記念写真

ますが、アメリカ留学中キリスト教の洗礼を受けて帰って来ており、自分でお経ができるほどの仏教徒（曹洞宗）であった新一郎とは信仰面の方向は違います。

長女千春は理学療法士を目指し北海道大学医療技術短期大学部でその資格を取得、病院勤務を経て現在は札幌のリハビリ専門学校で教員をしています。

新一郎が死去した時、北海道大学医学部の要請により遺体を解剖しています（脳は保存）が、千春は当時同医療技術短大部の学生であり、その解剖に立ち合っております。

次女結実子はデザイナーを目指し、神奈川県相模原市にある女子美術大学を卒業、デザイン系会社に勤めた後、現在はスペースデザイナーとして東京で開業しています。

## 2. 兄弟・甥姪・その配偶者

### (1) 実姉妹

成人した兄弟は3人でいずれも女子です。

3人とも北海道庁立札幌高等女学校（今の道立札幌北高）を卒業し、嫁して子を成しております。どうゆう縁だったかはわかりませんが、その配偶者はいずれも東京・京都の帝国大学出身です。その職業は医師、官吏、会社員でしたが、姉妹がこのような配偶者に縁づいたのは、新一郎の存在も大きかったのではないのでしょうか。



## (2) 庶弟

実業家であった高倉安次郎には外に2人の男子がいました。

2人とも慶応大学に進学し、弟の方は六大学野球のエースとして活躍しましたが、急性の病気で早逝してしまいました。

兄の方は母親の実家の家督を継ぎ、工藤英一を名乗って一家を成し、卒業後は研究の道を歩みました。専門は日本キリスト教経済史で、明治学院大学の教授を務め新一郎と同じ社会経済史学会の会員でした。敬虔なクリスチャンで人望があり、とくに東京方面の高倉一族のまとめ役をはたしてくれました。

## (3) 甥姪、その配偶者

新一郎とときは又従兄弟であったことから、ときの甥や姪も新一郎と遠い血縁がありますので、一緒に見て行きます。

新一郎、ときと両方につながっている私の従兄弟は私を除き13人いますが、女の従兄弟の配偶者を入れた男性の12人までが、大阪大学、名古屋大学を除いた五つの「旧帝国大学」か慶応大学、早稲田大学の出身者です。又その9人が医師を含む専門職・研究職に就いていまして、何らかの学会に属する立場でした。

その専門領域は広範に及びます。とくにユニークと思われる研究をあげてみましょう。(順不同)

- ① 菊池英一（新一郎甥） 最も先駆的な自動車の自動運転（工業技術院）
- ② 井村裕夫（とき甥） 脳に働くホルモン研究（京都大学—後に総長）
- ③ 松浦 剛（新一郎甥） 浄化膜の研究（カナダ オタワ大学）
- ④ 小田島成和（新一郎姪の配偶者） 癌の基礎研究（国立衛生試験場—後に病理部長）
- ⑤ 松浦 保（新一郎甥） イタリア経済研究（慶応大学）
- ⑥ 青柳謙二（新一郎姪の配偶者） トーマスマンとカフカの研究（北海道大学—後に文学部長）

## 3. 先祖の後を継いだ存在

一族の大多数が専門職・研究職一色に塗つぶさ

れていく中、新一郎の父安次郎の歩んだ道（実業界・政界）を継いだ人物もいます。

まず実業界では、安次郎のすぐ下の弟（治助）の長男、高倉一郎です。帯広出身で神戸高商（今の神戸大学）を卒業し、三井物産に入社、系列会社のセントラル硝子の重役を務めました。

今一人は新一郎の甥松浦昭（第1回目で既に触れました）です。東京大学法学部を卒業し、当時の農林省に入省、順調に地位を上げ、水産庁長官・食糧庁長官を経て退官、先祖の地北海道から1983年の知事選に立候補しました。丁度2期目を迎える横路孝弘知事（後の衆議院議長）と戦って大敗を契しましたが、北海道後志の地に自民党から地盤をもらい衆議院議員になりました（間もなく難病にかかり引退）。

ところで、父は多く選挙の応援を頼まれましたが、最も印象に残っているのは、「北海道生協連」の会長の地位にある中で、知事選の際、自民党推薦の堂垣内尚弘氏（当選し後に知事）を押したことです。多くの人から「お前の親父は何考えているのか？」と問われ、本人に質してみました。「なぜ生協の会長が自民党系の候補を押したらダメなのか？」と逆に問い返えされました。

松浦昭の場合には身内ですのでそんなことが問題になる事柄ではありません。

## 4. 新一郎を中心とした「高倉会」

「高倉会」とは広く姻族も含めた高倉一族の会です。1957年に私が実枝子と結婚し、新婚旅行で東京に立ち寄った折に、一族が集まって祝ってくれたのがきっかけで、新一郎、ときが上京した時



写真2 「高倉会」の賑わい（1978年11月）  
新一郎・ときのお金婚お祝いの会

(特に表彰や叙勲の時)に集まるようになりました。間もなく札幌でも「高倉会」ができ、新一郎を中心に幅を広げて継続されて来たのです。

特に松浦昭の知事立候補の時には「集票集団」のような役割を帯びました。1990年、新一郎他界の後には追悼会などもやりましたが、ほどなく自然消滅となっています。

## 5. 私が父からもらったもの

### (1) 本題にさきがけて

これまでも触れてまいりましたが、父と私の関係は一般的な父子関係をはるかに越えたものがあります。その分、父からもらったものは大きいと言えるでしょう。私のライフステージに合わせて見てまいります。

### (2) 幼少期

私が物心ついた時から父は学者で、学術文化の固まりのような環境があたり前だと思って育ちました。父の書斎で見つけた地図を見て、地理に興味を持ちました。

### (3) 中学・高校時代

在学していた中学校の図書室に、父が子どもを意識して書いた「北海道の歴史」が置かれているのを見て、父の歴史家としての存在を意識し、歴史への関心も持ちました。

しかし、学業では社会科に特化してしまい、そそっかしくてケアレスミステークが多いために成績があがらず、ずいぶん「不肖の子」と言われましたが、とにかく一浪してなんとか北海道大学文類に入学することができました。

高校1年生の時、特筆すべき思い出があります。

第1回目で高倉安次郎の胸像のことに触れましたが、その後太平洋戦争末期に金属として供出してしまいました。台座が残っていたので、新一郎が別に胸像を造り直し、1954年に再建の除幕式をしました。私が直系の孫として除幕をしたのですが、その時ご先祖というものを強く意識する機会となったことです。

### (4) 学生時代

3年目に学部移行があり、私はその年文類で移行点が高かった経済学部(父の所属学部)に行きました。周囲から特異な目で見られがちの中、

私はアツケラカンとして過ごしていたように思います。

卒業学年時父は学部長退任後就職担当教官で、一応全対象学生と個人面談があったようですが、私には何の話もなく、ゼミの大爺栄一先生(経済地理学)と相談して大学院を目指すことに決めました。

### (5) 大学院時代

大学院になると、新一郎(本人は1962年農学部配置転換)の息子であることを強烈に意識せざるを得ず、畏縮し行き詰まって、まわりの人々には顔向けができない修士留年の失態をやらかしてしまいました。

修士の学位はもらいましたが、博士課程には進まず、指導を受けていた林善茂先生のお世話で、教育学部の社会教育講座の助手に転身しました。これぞまさに親の七光りと言えましょう。

一からのスタートでしたが、転身の最大の動機は父の影響の外に出なかったということです。

### (6) 大学教員時代

父は北海道の社会教育界ではとくに文化行政の領域で大変有名な存在だったので驚きました。

私も社会教育領域の学習・研究を積み、対外的な仕事も増える中、直接的な関わりは少なかったのですが、父の存在を意識する機会はかなりありました。

私はなんとか五十才前に教授職(北海道大学医療技術短期学部)の地位を得、北海道年鑑の人名録に父のすぐ下で名を連ねるまでになりましたが、父は間もなく他界してしまいました。

### (7) 父の他界後

父の他界後も、父と離れるどころか父の後追い



写真3 新一郎の葬儀(1990年6月)  
花で北海道の形を描いた祭壇

のような形で人生を歩んだのです。

一つは父が創設者であるCOOPさっぽろの理事や同社会福祉基金理事長の任に就いたことです。

今一つは父が2代目学長を務めた北海学園大学に移って定年まで在籍したことです。

#### (8)現在

私は社会教育に関連した対外的仕事をする過程で財団法人「ふきのとう文庫」に出会いました。

これは一主婦が始めた私立の全国的にはユニークなバリアフリー子ども図書館（内容は当ニュースの50号で紹介していただいております）で、その活動内容に感銘を受け、毎年学生を連れ見学に行くうち役員（ボランティア）になり、札幌市西区から私が財団に土地を寄附した同中央区桑園の地に五年前移転して来ました。

一見父とは無関係に見えますが、それでも父から受け継いだものは大変重大です。

一つは「札幌遠友夜学校」（父が深く関わったことは既述）で新渡戸稲造が培ったボランティア精神です。私は現在「札幌遠友会再興塾」という組織の副会長を務めています。

今一つは私が八十年近く住み「ふきのとう子ども図書館」がある現在地、「桑園大学村」の伝統的文化風土と新一郎が遺してくれた土地です。

◎この小伝を書くにあたり、北海道大学名誉教授黒柳俊夫先生（農学部で新一郎が教授を務めた農政学講座の当時の助教授）のアドバイスをいただきました。

---

## 植物園と博物館

北大総合博物館 資料基礎研究系 高橋 英樹

---

この3月末で退職します。1999年に総合博物館が設置され11月に農学部附属植物園から移ってきたので、計19年ちょっと博物館に所属したことになります。この間、ボランティアの皆さんには大変お世話になりました。

植物園と博物館での管理運営にちなむ話は、2月24日のボランティア交流会でお話ししました。話をするにあたって昔のことを調べなおし、薄れていた記憶を手繰り寄せることができました。

植物園と博物館の共通点は、大学のコアである「学部」とは異なる「付属」施設ということでしょう。「付属」が気に入らなければ学部をつなぐ「共通」施設ともいえます。

大学の教育研究の主体である学生・院生が本来所属しない組織であることがユニークだといえます（最近では大学院を担当するようになりましたが）。私自身、このような2施設を渡り歩いてきたので一般の「学部」教員とは違って、あまり「教師」らしくなれず、反主流派を自認するようになりました。

植物園と博物館との違いは前者が生きた植物を扱うのに対し、後者は死んだ標本を扱うことでしょう。生きている植物はまったなしですから管理する人間が必要ですが、標本は既に死んでいるので「待って」くれます。

植物園に7-8名の技術職員が配置されているのに対し、博物館には標本管理のみを専門とする職員が一人もいない所以でしょう。博物館のボランティアの専門性が高まるほど、標本管理の専門職員の必要性が低くなるというジレンマも抱えています。

本学では植物園で入園料を徴収するのに対し博物館の入館料は無料となっているのも目を引きます。私が植物園にいた頃に入園料無料化を叫んだ時には、入園者が増えると芝生や植栽植物が傷むので制限しているのだと先輩スタッフから言われました。博物館の通路を騒がしく駆け回る子供たちを見かけると、先輩の戒めの言葉を思い返す今日この頃です。



## ボランティアの会第 33 回談話会

図書ボランティア（前酪農学園大学教職センター教授） 山田 大隆

北大総合博物館ボランティアの会第 33 回談話会は、2019 年 1 月 25 日（土）14:00～15:30、博物館 1 階「知の交流」空間で、会員 15 名が参加して行われた（16:00 から、2 階談話室で新年会を兼ねた講師を囲む懇親会、10 名参加）。

演題は『癌、自己免疫疾患、アレルギーと寄生虫』で、講師は北大大学院獣医学研究院寄生虫学教室特任教授の片倉賢先生であった。最初に講演に先立ち、司会者の会長在田一則先生から、講師は北大山スキー部の後輩で知己で依頼し快諾戴いたこと、平成 16（2004）年北大に戻り教授となったことの講師紹介があった。

### 講演の概要

講師は、歴史的なノーベル賞受賞問題での話題、細菌の発癌性への注目研究として寄生虫学は興味深いことを強調し、寄生虫と炎症性腸疾患、寄生虫の生態と人間より長い棲息史、人間との共生実態、寄生虫が炎症を抑える仕組み等の観点から分かりやすく（冒頭概略解説に TV アニメキャラ登場）、具体的に説明された。マイク使用がなく多小聞き難しく、基本的事項で非専門家に難解面もあったが、寄生虫の機能、歴史、今日でもその生理学的効果が解明研究中有るとの、90 分間親しみ易い語り口で興味深い貴重な研究内容の紹介をされ、事後質問も幾つかなされ、参加者に多くの感銘を与え、筆者も満足した内容であった。北大研究最前線の土曜市民講座などでもっと多くの市民に還元すべき講演と感じた次第である。

講演は以下の項目で展開された（レジメより）

- (1) 寄生虫（蠕虫）と炎症性腸疾患（IBD）衛生仮説とは
- (2) 寄生虫の定義と分類
- (3) 線虫類の特徴と発育
- (4) 鞭虫
- (5) 地球史と寄生虫
- (6) 超個体
- (7) 腸内細菌と種々の疾患との関係



ボランティア会の在田会長と片倉賢講師

- (8) 寄生虫はどう炎症性腸疾患を抑えるか
- (9) 寄生虫はどうアレルギー疾患を抑えるか
- (10) 寄生虫はどう炎症を抑えるか
- (11) マラリアと 4 回のノーベル生理学・医学賞
- (12) 2015 年ノーベル生理学・医学賞（大村智、W キャンベル）（大村の回旋糸状虫とオンコセルカ症、イベルメクチン開発）
- (13) 1926 年ノーベル生理学・医学賞（J フィビガーと不受賞の山極勝三郎、市川厚一）
- (14) 住血吸虫の分布、生活環（タイ肝吸虫）による胆管癌の発生
- (15) 国際がん研究機関
- (16) 蠕虫はなぜ癌を発生させるか

以下は、講演レジメの概要である。

・講師は最初に、子どもを極端な清潔環境に置いて生じる IBD 症候群としての潰瘍性大腸炎とクローン病を紹介した。寄生虫の定義として、生物での自分より大型の生物（宿主）の体表、体内での栄養分を利用して棲息（寄生虫）する（個体群間相互作用、寄生か共生）ものをいう。寄生虫の分類では、内部寄生虫（原虫で根足虫、孢子虫、鞭毛虫、繊毛虫で単細胞）、蠕虫（扁形動物で吸虫、条虫類、線形動物で線虫類で多細胞）、外部寄生虫（節足動物で昆虫でノミ、シラミ、蚊、ハエ、ダニでマダニ、ツツガムシ、疥癬虫）がある。

・線虫の特徴（脱皮動物で、外観は線状・円柱状で細長い、外表は角皮で覆われ、口と肛門がある。体壁の筋肉層が発達している。雌雄異体で、寄生性種と自由生活種がある）。動物寄生性の線虫では、

成虫が腸管内寄生、成虫が組織内寄生、幼虫が組織内寄生する。線虫の発育は外界では脱皮で発育し、宿主体内では雌雄分化で脱皮して成長する。鞭虫は動物ごとに異なる。

- ・地球史で見ると、ホモ・サピエンスの歴史 10 万年に対し、寄生虫史は 4 億年にもなる。超個体とは、多数個体から形成され、ひとつ個体のように振舞う集団である。通常、同種で構成の個体群、コロニーであるが（ボルボックス）、異性集団をいう場合（蟻や蜂）もある。人間は体内細菌を内包する超個体だが、その代謝系は人間固有、微生物のその混合である。人間は微生物（細菌、寄生虫、真菌、ウイルス）と共進化・共存している。

- ・腸内細菌と種々の疾患との関係では、大腸癌、大腸炎などの腸管関連疾患、糖尿病、動脈硬化、多発性硬化症、自閉症、認知症でのアルツハイマー病、パーキンソン病の脳神経疾患に腸内細菌が関係する。

- ・寄生虫は炎症性腸内疾患の抑制では、炎症性腸疾患は、腸内寄生虫が腸内細菌叢の組成に有益な影響を与えることが分かった。腸内寄生虫（蠕虫類）が、宿主に有益な方法で腸内細菌叢をどう操作するかに関する重要見解を提供する。これは、線虫に感染すると、腸内の細菌叢の変化を帰結する（免疫応答も変化すること）。それでは、寄生虫はどう炎症性腸疾患を抑制するかでは、クローン病のモデルマウスに鞭虫を感染させると、バクテロイデス細菌が減って、病気が改善する。また、寄生虫はどうアレルギー疾患を抑制するかでは、喘息モデルマウスに線虫を感染させると、クロストリディアレス細菌が増えて、盲腸内の脂肪酸が増え、肺の炎症が改善した。寄生虫はどう炎症を抑制するかでは、蠕虫（線虫）が放出する物質が、免疫細胞は腸管細胞を刺激するが、別の免疫応答になる。その物質を調べ、効果のあるものをワクチンに利用出来る。

- ・住血吸虫の分布では、ビルハルツ住血吸虫はアフリカ全域に分布し、膀胱の静脈に寄生し血尿が出る。肝吸虫の生活環では日本でも昔から鯉等の川魚を食して感染があり、胆管に住むが胆管癌の発生が多い。タイ肝吸虫での胆管癌は、川魚すり身を野菜混合で食する習慣で感染発症する（生活

習慣病)。タイではこの寄生虫の感染が北部、南北部で広まり胆管癌が急増している。

- ・国際がん研究機関は WHO の外部組織である。この機関は発癌メカニズムの解明、原因の特定での発癌程度の抑制目的で設立され、化学物質、放射線、ウイルスの人への発癌性を評価、公表する。この機関での発癌性分類は、当該物質の発癌性への科学的根拠の確実性を見たもので、癌の強さでなく、発癌のリスク評価でなく、発癌のハザード固定である（疫学調査の人の発癌性データ、実験動物での発癌性試験証拠、その他の関連情報）。

- ・まとめとして、蠕虫はなぜ癌を発生させるのかを考える。発癌物質のオキシステロールはタイ肝吸虫から、カテコールエストロゲンはビルハルツ住血吸虫から分泌されることが判明した。これら物質は DNA に損傷を与え、胆管癌、膀胱癌を発症させる。寄生虫の寄生による慢性刺激、局所の炎症による活性酵素の産出、その他の内在、外在性補助因子で癌発生するといえる。これは、1926 年フィビガーの癌発症での受賞で後日誤認とされ歴史上で抹殺された寄生虫実験の再評価となったもので、癌の寄生虫関与説の復活で注目される。

### まとめ 寄生虫学研究の今後の意義

以上の講演会内容から、寄生虫（蠕虫）として普段関心の低いこの動物への歴史、機能、生態、人体への影響（腸炎、発癌）の全貌を詳細に知って感銘し、参加者は感謝であった。筆者の科学的関心であった、ノーベル賞受賞との関係では、1926 年受賞のフィビガーの寄生虫説がこれまでの誤謬抹殺ではなく、今日の寄生虫学から再評価出来る点が興味深かった。受賞を逸した山極勝三郎のウサギ耳のコールタール塗布（7 年間）で人工癌作成実験（1915 年）に、困難な飼育、塗布で日夜協力した唯一の助手が東北帝大農科大卒（大正 2 年）の市川厚一で、市川は東大での実験終了後、日本学士院賞を得て北大に戻り、農学部教授となり、長男山極三郎も北大教授、帯畜大学長となった。この山極のノーベル賞レベルの研究伝統が、2015 年の大村智の受賞に継続している。その研究伝統史の一端を初期で担った北大の寄与（市川）は意義高く、講師のその明示は今回講演の最大の成果であった。



活動報告

虫には虫を～<sup>しらきとくいち</sup>素木得一天敵作戦～

図書ボランティア 久末 進一

『芭蕉の大敵象鼻虫 果然！臺中に現る』と見出しが躍る 85 年前の「台湾新聞」（昭和 9 年 2 月 13 日付）が、押し葉標本古新聞の中に埋もれていた。芭蕉産業は戦前の日本統治下にあった台湾で盛んだったから、それを食い荒らす象鼻虫大発生で、当時の脅威と恐怖が伝わる。焼却、伐採、青酸ガス燻蒸、殺虫剤散布といろいろ防除手段がとられたようだ。

この時の害虫駆除に「芭蕉象鼻虫の幼虫を食するジャバエンマムシと称するものが居るから、之を輸入し蕃植せしめて応用すれば効果が挙がる」と提言しているのが素木得一（1882-1970）である。昭和 12 年刊『熱帯園芸』（台湾園芸協会編第 7 巻第 4 号）に載った「バナナの害虫」という論文で、楚南仁博と共に発表した。

まさに「虫には虫を」という害虫駆除の天敵作戦のパイオニアとして、素木博士の台湾と日本を結ぶ活躍は特筆されるべきものだ。

明治 15 年函館出身。札幌農学校で松村松年門下で応用昆虫学を専攻、卒業後、明治 41（1908）年台湾総督府農事試験場技師として赴任した。当時、台湾で猛威をふるっていたのが果樹、樹木を荒らすイセリヤカイガラムシ。オーストラリア原産のこの害虫に侵入された米カリフォルニア州では柑橘産業壊滅の危機に見舞われた。明治 21（1888）年農業技師アルベルト・ケープルが原地で天敵探索を続け、遂にベダリアテントウムシを発見、これを輸入。人口増殖して被害地に放飼したところ防除効果は大きかった。

これに習い、素木技師は国派遣で渡米。天敵輸入をはかり、台湾で増殖して放し、好成績をあげた。ところが同時期、明治 44（1911）年静岡県興津町にあった明治の元勲井上薫侯爵の別邸柑橘園に、輸入移植された米産レモン苗木に付着したイセリヤカイガラムシが繁殖、大騒ぎになったのである。

同年 10 月から台湾総督府殖産局より静岡県にベダリアテントウムシを移入、飼育が始まり、翌



前列左より、素木得一、松村松年、岡本半次郎、後列左より、小熊捍、桑山茂、荒川重理  
札幌農学校昆虫学教室（明治 40 年頃）。

素木得一は当時、昆虫学教室の助教授であった。松村松年は、札幌農学校昆虫学教室（現・農学院生物生態体系学講座昆虫体系学分野）初代教授で日本の昆虫学の黎明期に分類学の大家として活躍した。全昆虫の分類群を対象としているが、特に鱗翅類・半翅類の業績が多い。岡本半次郎はチャタテムシ類などの専門家。小熊捍は、北大農学部・理学部教授、低温科学研究所所長、触媒研究所、国立遺伝学研究所長（初代）などを歴任した。専門はトンボ類の分類学、細胞学、遺伝学である。

年、静岡県農事試験場が全国配布事業を本格化する。農商務省支援で日本側桑名伊之吉技師と共に、日本初の天敵移入に尽力。素木技師は、台湾側で防除に貢献し、みごとに成功した。

化学農薬を続ければ、耐性を持つ害虫も増えて効果も薄れる。害虫を食べてくれる天敵には、農薬のように人体に有害な化学成分が農作物に残留する危険や、増えて生態系を脅かす環境負荷は少ないというわけである。

素木得一は大正 6（1917）年農学博士。昭和 3（1928）年台北帝国大学設立で理農学部教授、のち部長となる。昭和 17（1942）年退官、名誉教授。終戦で昭和 22 年帰国した。多数の新種昆虫を発見、約 150 編もの論文、『昆虫学辞典』他、名著多数を遺し、日本応用動物昆虫学会会長、日本昆虫学会会長を歴任。昭和 45 年心臓衰弱で世を去った。享年 88 歳。

ベダリアテントウムシの昭和 30（1955）年までの 40 年間の飼育配布数 345 万頭の記録があり、こ



の国庫補助事業は静岡県が平成 15 (2003) 年農薬取締法改正までの 91 年間も継続した。そして、天敵作戦は今も健在である。

### 素木しづと上野山清貢

素木の父は素木岫雲(教育者)、妹は素木しづ(作家)、子息は素木洋一(窯業工学者)、そして、しづの夫は上野山清貢(画家)である。

函館、札幌などで校長を務めた、教育者の父素木岫雲が明治 32 年病死したため、長男の彼が母由幾と妹しづを父親代わりに面倒をみることになる。それは明治 41 (1908) 年台湾赴任後も続き、彼は一家の大黒柱だった。

素木しづは明治 28 (1895) 年札幌生まれ。札幌高等女学校在学中に登山で転倒、右脚が結核性関節炎になり、卒業後に一家で上京。遂に右脚大腿部を切断した。

若くして障害者となった煩悶の末、文学への道を選び、大正 2 (1913) 年、作家森田草平に師事。18 歳の時『松葉杖をつく女』で文壇デビュー。『三十三の死』『咲いてゆく花』など、生涯に 50 編ほどの中、短編作品を残し、女流作家の地位を確立する。障害者ならではの屈辱の体験から、苦悩を自力で浄化し、悲劇から再生する心理の過程が繊細で痛々しいほどの感性で綴られ、「一葉以来の才筆」とも評された。

自らの短命を悟り、死の予感と愛する者への心情が各作品に滲んでいる。

大正 4 年、転地療養先でしづが出会ったのが、まだ無名の貧しい洋画家、上野山清貢である。彼は明治 22 (1889) 年江別生まれの 26 歳、しづ 20 歳。2 人は熱愛の末、結婚。やがて 1 子を設けることになる。

だが、得一はあまりこの結婚に乗り気ではなかったという。将来の生計も含め、最愛の妹を自らの庇護の許に庇い続けておきたい肉親の情としては、当然のことだったのだろう。

しかし、2 人には深い結びつきがあった。それはしづの作品で時折語られる言葉「運命の先を歩く」という決意かもしれない。

だが、5 年間の文壇生活の後、しづは大正 7 (1918) 年肺結核で死去する。享年わずか 23 歳の

夭折だった。

そして、しづ亡き後、苦勞しながらも絵を描き続け、上野山清貢は大正 13 (1924) 年帝展初入選以来、『パラダイス』『F 嬢の支那服を纏える』『室内』の連続特選で画壇にその名を知らしめる。

道立近代美術館収蔵の『室内』が示すように、構図、色彩の緊密な表現が、やがて多彩なモチーフの自由奔放な画風へ発展し、枠にとらわれない野性的で精悍な表現が魅力になっている。戦前戦後を通じ都道が多く、全道各地を訪れて数多くの絵を描いた。

植物標本の押し葉古新聞で収集された「北海タイムス」(昭和 14 年 6 月 10 日付) にも、札幌市役所の依頼で大通り公園西 5 丁目の「聖恩碑」碑文「せいおんむきょう 聖恩無疆」を執筆提供した、閑院宮家への御礼献上する絵の制作者に選ばれ、絵筆をふるったという記事が載っている。

全道展創立にもたずさわり、美術界の重鎮だった彼は、しづの死後 42 年間生き、昭和 35 (1960) 年、70 歳で死去した。共に悲運から逃げず、死の恐怖に絶望せず。迫る運命の先を歩いていくしづとしづを支えた清貢を見守り続けた得一は、日本と台湾を結ぶ昆虫学界の権威となり、さらにその先 10 年を生き、昭和 45 年、88 歳の天寿を全うして死去した。

夭死であれ長寿であれ、自らの人生を薄幸と嘆く前に、精一杯、堂々と歩んだ者たちにこそ運命は微笑むのかもしれない。

参考引用：▽「ウイキペディア」他、ネット情報。  
▽古橋嘉一講演(東京農大総合研究所研究会生物的防除部会昭和 21 年度第 2 回講演会)「ベダリアテントウムシ導入から百年」より部会ニュース NO. 40 (昭和 22 年 2 月 12 日刊)。



#### 写真パネル展

### エゾリス ～冬を生きる～

- ・2019 年 2 月 23 日～  
4 月 14 日まで
- ・北大総合博物館  
1 階企画展示室
- ・入場無料
- ・月曜休館



## 活動報告

## 骨ボランティア活動報告～CISE サイエンス・フェスティバルでの取り組み～

考古学ボランティア動物骨格標本作成班

翁 哲毅・謝 倩氷・竹内 颯・田中 望羽・濱崎 瑠菜・森本 智郎・弓削 龍之介・渡辺 双葉

## I. ごあいさつ

皆様こんにちは！考古学ボランティア動物骨格標本作成班、通称骨ボラです！私たちは毎週水曜日の18時から、北海道大学総合博物館2階の解剖室で鳥類や哺乳類の標本の作製と管理をしています。普段は博物館の「裏側」で活動をしている骨ボラですが、今回CISEサイエンス・フェスティバルに初出展しました。CISEサイエンス・フェスティバルとは、CISEネットワークの事業の周知を目的としたイベントです。CISEネット参加機関の活動、および開発を進めている教材や公開講座などの紹介が行われます。年1回開催され、今年度は総合博物館が会場となりました。今回はこの場をお借りし、骨ボラの初出展の様様をお伝えします。

## II. 出展ブースの企画

昨年12月に、サイエンス・フェスティバルへの出展が決定しました。開催日は今年の1/13と1/14です。約一ヵ月で準備をする必要がありますが、まず初めに、「展示を通してどのようなことを伝えたいのか」「何を展示すればよいのか」をメンバーで話し合いました。その結果、「鳥類の羽の構造色について」「翼・尾羽の部位と機能」「標本作成・骨ボラ活動報告」の3点を主軸として展示を行うことにしました。使用する標本の多くは、私たち骨ボラが作製したものです。解説カードや標本タグもメンバーが得意分野を生かし、手作りしました。

## III. 当日の様子

小学生を主な対象としてブース（写真1）を作成しましたが、大人の方も展示を楽しんでいました。子どもに比べ大人の方が、鳥類に対しある程度固まったイメージを持っているため、「へー！」と驚いてくれることが多かったです。特に、エミューの骨を組立てると、子どもも大人も盛り上がりました。

また、ホームである総合博物館が会場となって

いることを生かし、展示に興味を持った来場者をバックヤードにお連れしました。ツアーに参加した中学生の方は、博物館の裏側に入るのは初めてで、バックヤードの広さに驚いていました。案内を担当した骨ボラメンバーは、進路を考えるヒントになるよう、標本の意義や博物館の役割についての解説もしました。畜産学系の学生は、「(骨格標本の作製について) 教えてくれる人や機材がない」と話していたため、実際にどのように解剖しているのかをお見せし、標本作成についてのノウハウを伝えました。

## IV. 反省とこれからの活動

今回骨ボラはアウトリーチに初挑戦しましたが、準備や当日の解説も含め、楽しく活動することができました。短い準備期間でしたが、連携もうまくいったと思います。一方、「展示」というものに慣れておらず、使用する什器や備品の選定は改善の余地があります。今回大半の標本に触れるものとして展示しましたが、一部の標本には「触らないでね」というタグをつけました。次の機会には、透明フィルムで標本の周りを囲む等の対応をし、全て触れる標本として展示したいです。

骨ボラはこれからもこれまで通り、標本の作成と管理を行いますが、このようなアウトリーチの機会を生かし、博物館の「裏側」ならではの楽しさをお伝えできればいいなあと感じました。



写真1 骨ボラ出展ブースの様子



## 活動報告

## オホーツク文化の旅

考古学ボランティア 井宮 淳恵

一昨年、私は北大に通う息子の病気を期に大阪から札幌へ期間限定でこちらへ参りました。

息子は3年生まで博物館サークル Mouseion (ムセイオン) に所属しておりましたので「時間があるなら博物館でボランティアをしてみたら?」と教えられこちらでお世話になる事になったのです。

大阪では埋蔵文化財の仕事に携わっていたので迷う事なく考古ボランティアを選びました。

最初は主に骨角器や石器の整理をしていました。さすが北海道、骨角器は海獣から作られた農具や狩猟の道具、身の回りの品々、そしてクマを模したオモチャのような物までありました。

アイヌ文化に移行したんだなど容易に想像できるそれらの遺物は 収蔵されている引き出しを開ける度にワクワクさせるものでした。

そのうち経験者という事もあり土器の実測や復元もやらせていただけるようになりました。そこで出会った土器はその後の私の北海道での旅の道標になるものでした。

それまでオホーツク文化というものを漠然としか知らなかった私は形の歪んだ土器を目の前に少々戸惑いました。同じ時に作られている手の込んだ骨角器に比べ土器は無骨なものでした。轆轤で作られた規則正しい文様のある弥生土器などを扱ってきた私はオホーツクの土器に正直少しがっかりしたのです。

しかし作業をしているうちある土器に出会いました。体部にはアザラシやアシカなどの動物、水辺の鳥、口縁部には熊の足跡の文様が施されているものでした。それを見た時、何ともいえない愛おしさに似た感情が沸き起こりました。

正直、私の北海道での生活は精神的にきつものでした。馴染みのない土地、慣れぬ雪、会って話す友達がいない淋しさ、息子の病状。

その土器は繰り返される厳しい冬、美しい実りの季節を通して命の危険と隣り合わせに力強く生きた人々の生活が集約されているようでした。そ

れに比べ自分の置かれている状況がいかにかえられたものかと考えさせられたのです。

作業で出会った遺物は礼文島の香深井遺跡、オホーツク沿岸の枝幸の目梨泊(めなしどまり)遺跡の物で今から 50 年以上も前に北大が発掘したものです。

札幌から何百キロも離れた場所で当時の北大生達が便利な道具もなく発掘作業をするのは、きっと色々な苦労があったんだろうなと感慨深くなりました。

そのうちオホーツク文化をもっと知りたい、過去の北大生がいた場所の風を感じたい、その気持ちが私を突き動かし、一人車で何百キロ移動の旅に度々出かけるまでになりました。

稚内にある百年記念塔に展示してある香深井の遺物、枝幸のオホーツクミュージアムの目梨泊遺跡ゾーンに展示されている重要文化財の数々。

サロマ湖畔の常呂遺跡や網走の海岸のモヨロ貝塚、北方民族博物館、クマや海獣を模した土器や土人形などの遺物に心躍らせました。

何よりも私を感動させたのは遺跡のある景色でした。

美しい手付かずの平原や丘や青い海は遠い昔から何も変わらずにそこにあり、過去の学生達もオホーツク人もそこに存在していたのです。

埋蔵文化財を扱っていると 当時の人の気持ちになって考えたりする事が度々あります。先の話ですが七月からは北大構内で発掘された遺物の展示も始まります。是非足を運んで過去にここに生きた人々の気持ちになってみてください。

経験者という事で少し踏み込んだ活動をさせて下さった先生方、一緒に作業した仲間達、博物館で出会った皆さんに感謝して私は三月で札幌を去ります。

素敵な時間を与えて下さり 本当にありがとうございました。



活動報告

風邪にご用心—古新聞から

図書ボランティア 久末 進一

植物標本乾干挿みになっていた 100 年前の「國民新聞」(大正 8 年 1 月 30 日付)に、あの「<sup>スペイン</sup>西<sup>シベリヤ</sup>班牙風邪」(北海道では西伯利風邪)の警告記事が載っていた。

大正 7 (1918) 年から同 9 年までに、当時の世界人口約 20 億人の約 3 分の 1 が感染、4 千万人余りが死亡し、日本でも約 45 万人が病死した凄まじい悪性感冒としてしられる。(当時の内地の人口約 5,500 万人)

アメリカから飛び火したスペインで爆発的に流行し、以来、その名がついた。

『戦慄すべき死亡率』として、記事は『病毒が一度或人種又は動物に伝染し、それより同人種又は同動物間に伝染する場合には、非常に猛烈な悪性なものと変化する。今度は死亡率 30 乃至 38% で、長く高熱が続き、肺が犯され心臓マヒ又は呼吸困難で死に至る (要旨)』と報じている。

ウイルス認識も有効薬もまだ無い大正庶民は、外出や人ごみを避け、重ねガーゼ(縦 2 寸横 3 寸)の口掩い(マスク)を装着し、手洗いと塩水うがいを習慣化。民間療法で症状をやわらげつつ、体力と自然治癒力を頼りに生き延びたきた。

だが、翌年の大正 9 年 1 月 16 日付「**北海タイムス**」(札幌市公文書館蔵)記事は、衝撃的である。

『西伯利風邪の魔の手は今や全道を襲はんとす。豊平の火葬場戦場の如し。道庁衛生課の調査せる 15 日迄の全道各地に発生せる流感患者数は 1327 人にして死亡 39 名なり。元日から昨日迄に札幌区

役所に届出た死者は 168 名。一日平均 16 人余となるから是では到底焼き切れないのも当然』という記事で、火葬炉 10 基を設けていた都市部でさえ対処不能に陥ったほど死体があふれた。

札幌区役所管轄内患者 1265 名の内死者 42 名(同 1 月 14 日付)。

『北大総長佐藤昌介氏も感冒にて目下休学静養中なり』(同 1 月 17 日付)の記述もある。

劇作家島村抱月がこの風邪で急死。女優松井須磨子が悲嘆のあまり後追い自殺したほか、エゴン・シーレ、マックス・ウェーバー、アポリネールと、死に至った有名人は数知れず。

いつ、どこで牙を剥くかわからないのが殺人ウイルスである。

同紙 2 月 7 日付『**全国流感状況**』では、内務省衛生局調査の大正 8 年 12 月 1 日～同 9 年 1 月 25 日間の患者 37 万 3658 人中、死者 6583 人の東京をトップに大阪、兵庫と続き、北海道は 15 位で 1 万 2556 人中、4186 人の死者を記録。特に 10 代と 20 代の死者が多い。

昔も今もウイルスとは共存するしかないとすれば、最後は人間の生命力を信じるしかない。「タミフル」頼みだけでは安心できない。

いま、流行の A ソ連型ウイルスは「**西班牙風邪**(西伯利風邪)」の子孫であることを忘れてはならない。

参考引用:「ウイキペディア」他、ネット情報

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 52 号

- ◆編集人: 北海道大学総合博物館ボランティアの会 (編集委員: 星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人: 在田一則
- ◆発行日: 2019 年 3 月 1 日
- ◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>